

入選

私に足りない力

鹿児島県 根占中学校

二年 重久 千鶴

「ちょっと、買い物行ってきて。」

家族で、母方の祖父母宅へ遊びに行っていた。外はからっとした快晴で、外で遊ぶには絶好だ。しかし母は、そんな私に買い物を頼んできたのだ。おまけに家の片づけをするからと、2歳の妹の子守りまで押しつけてきた。しぶしぶ妹とスーパーに出かけた私は、さっさと買い物を済ませようと、頼まれた野菜を急いでかごに詰め込むと、レジへと向かった。

だが、レジには10人ほどが列をなしている。一瞬たじろいだが、仕方なく列に加わった。なかなか進まない。15分ほど待たせようか、私の2人前の人がようやく会計を始めた。

「もうすぐだな。」安心したのも束の間、妹が待ちくたびれて泣き出してしまった。ふだん、妹の世話などほとんどしない私は、あわてて強い口調で叱ってしまった。すると、妹はさらに大きな声をあげて泣き出してしまった。

私は、一刻も早く店の外に出たかった。しかし、レジがやっと目の前に来て、今さら列を出るのはいやだった。どうにもならない状況に、なおさら困ってしまった。そのとき、「お先にどうぞ。」と声が聞こえた。前に並んでいた初老の女性が、笑顔でこちらを見ていた。

「え、あ、ありがとうございます。」

泣きじゃくる妹を連れて、半分パニックだった私は、言われるがままレジに進み、会計を済ませると、お礼もそこそこに、スーパーを出てきてしまった。

その日の夜、布団に入ってから改めてその女性のことが気になった。私以上に長時間並んでいただろうに、あのあとスムーズに会計できただろうか。私が逆の立場だったら、笑顔で前を譲ることができるだろうか。

ふと、私の苦い思い出がよみがえった。先日、別のスーパーで4歳ほどの女の子が一人で立っているのを見かけた。周りにはたくさんの方がいたが、女の子が見えているのかいないのか、声をかける人はいない。

「声をかけた方がいいのかな。」そう思ったが、なかなか勇気が出ない。そうこうしている間に、女の子を見失ってしまった。「きっと、お母さんが見つかったのだろう。」そう自分に言い聞かせるが、罪悪感には消えない。もやもやした気持ちを抱えたまま一日を過ごした。

私は考えた。私と私に順番を譲ってくれた女性の違いはなんだろう。私はなぜ、思ったことを行動に移せないのだろう。「面倒くさい」「今は時間がない」「恥ずかしい」自分が変わるためのチャンスを、いつも理由をつけては後回しにしてきた。

あの日、レジを譲ってもらい、助かった自分。あのとき、女の子に声をかけられなかった自分。あと一步の勇気を振り絞らなければなにも変わらない。そう、私は変わらなければならない。

今の私に足りない力が備わったとき、その先にある世界を見てみたい。